教育資料室だより

No.6　　令和3(2021).4.1

発行　桐生市立教育資料室

桐生市小曽根町1－9　電話･FAX (43)3171

桐生の人物 <その2>

佐羽喜六（さばきろく）

1858[安政5]
～1900[明治33]

佐羽喜六は、小学校社会科副読本「わたしたちの桐生」にも取り上げられている『日本織物株式会社』の設立及び経営の中心となって活躍した人です。

喜六は、下野国足利郡葉鹿村の青木家に生まれました。学制が発布された明治５年、14歳のとき、当時、桐生新町一の買継商だった佐羽商店に奉公に入ります。やがて主人の吉右衛門にその才能を認められた喜六は、明治９年佐羽家の娘婿となります。ときは明治時代初頭。富国強兵を掲げた政府は、欧米に追いつけ追い越せと殖産興業政策を進めていきます。群馬が誇る世界遺産「富岡製糸場」ができたのも明治５年のことです。そんな中、喜六は明治19年欧州･米国に渡りジャカードやピアノマシンといった新型機械を輸入し、織物産業の近代化を図ります。さらに桐生に止まらず日本の経済発展を考えていた喜六は、織物の大規模生産を一貫して行える工場を建設する事業に着手します。それが『日本織物株式会社』です。

この会社は明治20年に創立されますが、スケールの大きさは、群を抜いていました。機械の動力源には、渡良瀬川から取水した水力発電による電気を利用し、開通したばかりの両毛鉄道[現ＪＲ両毛線](この鉄道建設にも佐羽商店が深く関わっています)の桐生駅とも軽便鉄道で結ばれていました。従業員数は最盛期には約600人、敷地は今の市民文化会館及び駐車場･厚生総合病院･市役所･ハローワーク等の一体がすっぽり入ってしまうほどで、すべて合わせると10万坪近くもあった(＝佐羽秀夫卓話集から)とのことです。水力発電は、着工当初から幾度も洪水(足尾銅山の開発によって山が荒れたことが一因と推測されます)に遭って水路が破壊されるという試練に見舞われます。しかし、困難を乗り越え、工場は明治22年に創業を開始し、徐々に業績を伸ばしていきます。

『織姫繻子』を主力商品に漸く経営が軌道に乗ってきた矢先の明治29年、筆頭株主だった佐羽商店が経営破綻した影響などで工場の操業がうまくいかなくなり、30年に会社は人手に渡ってしまいます。そこで喜六は、一旦経営から退きますが、新会社に残って勤務を続けます。ところが、33年、中国に出張した帰途、海難事故に遭い、まだ42歳という若さで帰らぬ人となってしまいました。

もしも喜六が再び経営者に返り咲いていたら、桐生の織物産業は、その後どんな展開を見せたのでしょうか。

余談ですが、桐生厚生総合病院の脇に『日本織物株式会社』の遺構があることはご存じかと思います。レンガ積み遺構と発電用タービンです。正確に言うと、このタービンは『日本織物』創業時に据え付けられたアメリカ製のものではなく、『東洋織布』時代の大正13年に入れ替えられたドイツ製のものです。電気は主に工場の動力用として使われていましたが、明治27年に『桐生電灯会社』を設立し、桐生町への配電事業も行いました。供給量が少なく、ほんのり明るくなる程度ながらも町に1000灯の電灯が付くようになります。

今、発電所遺構の脇は、桐生商業高校から陸上競技場そして浄水場へと続く広い道路になっています。しかし、50数年前頃は、まだ水路に沿って植えられた杉が、歴史の重みを感じさせるように鬱蒼とそびえ、その先には水源地と呼ばれた林がありました。[次ページ参照]

もしも桐生大橋のたもとで桐生名物を食べる機会があったら、腹ごなしに、ほんの一部だけ残っている杉並木や発電所遺構を見学してくるのも一興かもしれません。

☆参考『明日へ伝えたい桐生の人と心(上巻)』『桐生織物史と産業遺産-亀田光三論文集-』『桐生市史(中巻)』『桐生の歴史を語る-佐羽秀夫卓話集-(桐生南ロータリークラブ刊))』「桐生市ＨＰキッズページ」

発電に使われた水路沿いの杉並木が残っていた頃の写真です。

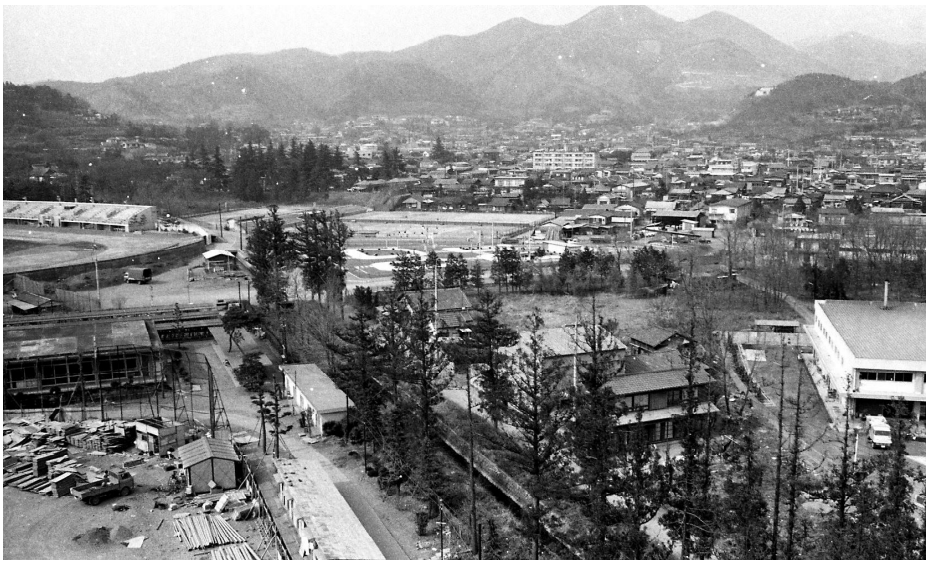
撮影時期は不明ですが、市役所は新館がまだできていません。産業文化会館や改築前の厚生病院が写っています。昭和中も木造校舎です。

水路跡は、木の下に隠れています。

水源地と呼ばれていた林

陸上競技場

桐商は何かを建てていたのでしょうか。建築資材のようなものが見えます。



ここには
水路跡が確認できます。

左の写真はさらに以前の頃のようです。しっかりとした石垣と、水が流れていた様子が分かります。はっきりしないのですが、おそらく画面奥が現在の厚生病院方向と思われます。